

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名矢嶋 俊介

学科名・専攻名バイオサイエンス学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 講じている ☐ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	基礎的・基盤的知識の修得と生命科学に係る実践的な専門科目を体系的に学ぶため、「総合教育科目」、「外国語科目」、「専門教育科目」の 3 つの科目区分に授業科目を配当し、さらに、これらを細分化することによって効果的な学修を行っている。また、修得した知識と技術から専門性の高い卒業論文研究に導くための科目も配当している。	1 年次生の入学時にリメディアルテストを実施し、大学教育を受けるにあたって不足している基礎学力を補う。全学年に渡り成績不振学生には担任が面談し、学習指導を実施している。基準となる年間最低修得単位数を設定することで、学年による習得単位数に偏りがないようにしている。授業アンケートを実施し、教員にフィードバックしている。全学 FD 委員会での議論等を通し、定期的に効果的なカリキュラム改正を行っている。	講義履修生には、事前に評価方法を明示し、試験またはレポートを客観的に点数化することにより、公平性かつ適正性を確保している。また、学科での卒業判定会議を開催し、厳格な判断により学位を授与する予定である。	卒論中間発表ならびに卒業論文審査を、複数の教員により行い、学科のディプロマ・ポリシーに見合う学習成果を適切に評価する予定である。	教育課程の編成や実施方針の適切性については、適宜、学科所属の全教員により、学科会議において慎重に議論され決定されている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・早い段階から実験実習をとおして、実践的な専門知識・技術を修得する。	【長所】 細やかな個別指導が可能である。	【長所】	【長所】	【長所】
	【特色】 ・2 年次から実習科目を多く配当している。	【特色】 学科の全教員を担任として配置しており、学生との距離が密接である。	【特色】	【特色】 卒業生の多くがディプロマ・ポリシーに見合った職種に従事することが期待される。	【特色】
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	アドミッション・ポリシーに基づき、生命科学に関する強い関心を持ち、食料、環境、健康問題の解決にチャレンジできる学生を求めている。学生が入学するにあたり必要な知識については、入試科目として示している。これらは入試要項、大学ホームページ等に記載している。また一般入試やセンター試験利用入試といった筆記試験による選抜方法の他に推薦入試、社会人入試、外国人入試等を設定している。推薦入試では小論文と面接を行うことで、学力のみならず、生命科学に関する問題意識や論理的思考、多様な人々との協調性を持った学生の受け入れを行っている。また、学科長を中心とした学科教員による入試判定委員会により合否判定を行うことで公平かつ客観的な入学者選抜を実施している。	各入試制度別の入学者数の把握を行うことでアドミッション・ポリシーに基づいた入試制度が機能しているか点検を行っている。特に指定校推薦入試については、入学後の学生の成績や推薦状況に応じて指定校の検討を行ってきた。また、公募制推薦入試に関しても面接において基礎学力を評価できる方法を活用することで、最低限の学力を担保できるよう努力している。加えて、学科会議内で入試制度別の受け入れ人数や試験科目の見直しについて議論を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・多種の入試を行うことで、多様な学生が入学する環境となっている。就職状況からも多くの卒業生が食料、環境、健康系の企業に就職しており、求める学生像に沿っていると考えられる。	【長所】 ・指定校を検討し見直しを行うことで、毎年、一定数の入学者を確保している。
	【特色】 ・生命科学に関するより高度な専門知識の習得を求めて、毎年大学院へ一定人数が進学している。	【特色】 ・幅広く生命科学に興味を有する学生を募集するために H29 年度入試より、理科の選択科目に従来の化学、生物に加えて物理を追加した。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・入試方法が多様化することで、学力面での差が大きくなる傾向がある。	【問題点】 ・公募制推薦入試の志願者が減少傾向にあるため、出張講義や模擬講義での広報活動が続けて行う必要がある。
	【課題】 ・入試制度別の学力差をどのように埋めていくか検討する必要がある。	【課題】 ・引き続き入試制度別の受け入れ人数や試験科目の見直しについて検討していく。
根拠資料名	入試要項、大学ホームページ、就職状況一覧	入試要項

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学部、学科ともに方針を明示している。「設置の趣旨」に基づき、バイオサイエンス学科では、生物と化学を基盤として、個体内、さらには、細胞内の生命現象を分子機能の観点から理解する生命科学を修得させて、農学、さらには、産業に応用できる専門家を養成するための専任教員を配置することとしている。 専任教員の採用は原則として公募し、募集要項にて専門分野に関する能力、教育に対する姿勢等、教員に求める資質を明示している。	方針のもと、専任教員として、教授 11 名、准教授 3 名、助教 4 名の計 18 名とし、文部科学省の設置基準を上回っており、十分な教育・研究指導を行うことが出来る。 昨年度まで男性教員 17 名、女性教員 1 名であったが、本年度より、男性教員 15 名、女性教員 3 名の体制。 動物、植物、細胞分子機能の 3 分野に、各 6 名ずつ教員を配置し、適切な年齢・職位バランスを考慮した採用・昇任を行っている。 担当授業は分野で均等になるように配置することで、1 教員当たり担当講義数は偏ることなく配当している。	教員人事については、学科の教授により構成される人事委員会により、以下の資料に基づき実施している。 募集・採用・昇格については、職階ごとに「東京農業大学・短期大学部における教員採用・昇格に関する条件」を定め、「研究業績得点化表」・「教育・管理業務・社会活動評価得点化表」に基づき、審査を実施。採用にあたっては、人事委員会による候補者の一次審査（書類審査、3 名程度の候補者選抜）および二次審査（面接）を実施している。新規採用者については「大学教員専任化審査判定表」を採用時に作成し、5 年目に判定表を基に専任化の判定を行う。 その後全学的な人事専門委員会と教授会にて審査が行われる。	本年度より全学的な FD 委員会に 3 名の学科教員が委員として参加。 毎年、自己教育評価を実施し、授業・研究指導・国際交流・大学運営・学外活動の評価。授業については、上記に加えて学生による授業評価を実施し、授業向上に取り組んでいる。 また、先端研究を推進させるには、先端技術を駆使した機器及び試薬の使用が必要であることから、原則として教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請することとし、年度末に外部資金申請者を確認している。	本年度の改組に先立ち、一昨年前より動物・植物・微生物・機能性分子の 4 分野体制を動物・植物・細胞分子機能の 3 分野体制とし、本年度より本格的に新体制となった。 昨年度まで 1 名だった女性教員を本年度より 3 名に増員したことで、より細やかな女子学生への対応可能となり、女性視点からの意見を得られる機会が増えた。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・生命科学の幅広い専門分野に渡る教員の配置	【長所】 ・学科を構成する 3 分野にバランス良く均等な教員数を配置している。	【長所】 ・点数による明確な昇格目標の提示	【長所】 ・競争的研究資金の獲得推進	【長所】 ・3 分野に各 2 研究室とバランスのよい 6 研究室体制
	【特色】 ・生命科学の幅広い分野の人材確保	【特色】 ・3 分野 6 研究室に各 3 名の教員を配置。	【特色】 ・	【特色】 ・競争的研究資金への申請	【特色】 ・複数の女性教員配置
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名	設置の趣旨（文科省提出資料）		・東京農業大学・短期大学部における教員採用・昇格に関する条件 ・研究業績得点化表 ・教育・管理業務・社会活動評価得点化表 ・大学教員専任化審査判定表	・自己教育評価 ・授業評価	

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名矢嶋 俊介

学科名・専攻名分子生命化学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 講じている ☒ 一部講じている ☐ 講じていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☐ 一部行っている ☒ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	本年度開設の学科である為、文部科学省に対する設置届出に基づいた教育課程を編成している	通常の講義科目の他に演習科目などによって教員と学生が密に接する機会を設けている	適切な成績評価に努めており、問題は発生していない	学位授与方針に従った評価を行っている	開設 1 年目であるため特に問題が生じておらず、点検・評価は行っていない
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・今後も申請にて編成した教育課程に基づいた教育を行う	【課題】 ・2 年次生の学生実験が開始される為、効果的な実験を構築する	【課題】 ・次年度も同様に運営していく	【課題】 ・次年度も同様に運営していく	【課題】 ・なし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☐ 行っている ☒ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	本年度は昨年度と同様の学生募集、入学者選抜を行った。募集の制度は適切であり、入学者選抜方法は公正である。推薦入学については面接官によって差が無いように質問内容などを一部統一するなど不公平にならないように努めた。	大学の方針により入学定員が増加することになった。その対応のため、特に学生実験環境の整備について検討した。学生実験室の運用に関して現在でも検討中である。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・学生実験室の運用に関して早急に対処策を決定する必要がある
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☐ つなげている ☒ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	教員組織の編制に関する方針を明示しており、適切に運用している。	教員組織を適切に編制している。有機合成化学研究室に新たに 1 名の助教を配置する(平成 30 年 4 月着任予定)ことにより、一層の充実に努めた。	有機合成化学研究室に新たに 1 名の助教を採用した。	新任教員に対する研修を通じて教員としての資質向上をはかっている。	有機合成化学研究室の教員数が少ないという分析から、教員 1 名の採用に踏み切るなどの取り組みを行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・今後も現状を継続していく	【課題】 ・今後も現状を継続していく	【課題】 ・今後も必要に応じた採用、昇任をおこなっていく。	【課題】 ・教員一人一人の資質向上を図る方策を学科内で検討していく	【課題】 ・今後も現状を継続していく
根拠資料名					

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名矢嶋 俊介

学科名・専攻名分子微生物学科

1. 教育課程・学習成果に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。	学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。	成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。	学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。	教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	■ している □ 一部している □ していない	■ 講じている □ 一部講じている □ 講じていない	■ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない	■ している □ 一部している □ していない	■ 行っている □ 一部行っている □ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	語学についてはクラス制による効果的な講義を行っている。また、教養科目も学生が選択しやすい体制になっている。学科専門科目について他の科目との連携を行い、学習の理解度向上につとめている。	通常の講義・実験だけでなく、フレッシュマンセミナーや共通演習を通して教員からの指導を行った。また、卒業生に大学生活および社会人としての心構えを伝えて頂いた。	科目ごとに評価基準を明記し、かつ口頭で学生に説明している。	カリキュラムツリーに基づいた教育をするように全教員で心がけた。学生にそのことが十分に伝わっている。	学科会議で成績評価の仕方、基準、学科方針について適宜相談、調整を行っている。また、複数教員で行う講義を基盤とし、教え方や試験法など教員間での議論も行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・専門科目の理解度の向上	【長所】 学習の活性化	【長所】 学生からの成績に関する相談件数が少ない	【長所】 学位授与方針について学生が理解している。	【長所】 教員間での情報共有の充実およびこれに伴う適切性の向上
	【特色】 ・専門科目に対するモチベーションが高いことが伺える	【特色】 学生が各科目の重要性や連携性を理解した。	【特色】 学生が成績評価基準および成績に納得している	【特色】 各科目の重要性および連携性を理解している。	【特色】 適宜、会議や相談をすることで教員の認識、改善につなげている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・GPA の低い学生がいる	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし	【問題点】 特になし
	【課題】 ・教員の指導強化	【課題】 自分の現状および将来像の明確化の促進	【課題】 特になし	【課題】 特になし	【課題】 特になし
根拠資料名					

2. 学生の受け入れに関する点検・評価項目

	①	②
点検項目	学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）に基づき、学生募集及び入学者選抜の制度や体制を適切に整備し、入学者選抜を公正に実施しているか。	学生の受け入れの適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に 対する 現状説明	学生募集および試験選抜を行う前にそれぞれアドミッション・ポリシーに準じているかを全教員で確認し、入学者選抜に対しても全教員で判断を行っている。	学生の入学時受験科目、その他の情報と GPA を照らし合わせることで、GPA 下位者が入学時にどのような状況であったかを確認している。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・アドミッション・ポリシーに準じた対応	【長所】 ・アドミッション・ポリシーに準じた対応
	【特色】 ・アドミッション・ポリシーに準じた対応	【特色】 ・アドミッション・ポリシーに準じた対応
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名		

3. 教員・教員組織に関する点検・評価項目

	①	②	③	④	⑤
点検項目	各学部・研究科等の教員組織の編制に関する方針を明示しているか。	教員組織の編制に関する方針に基づき、教育研究活動を展開するため、適切に教員組織を編制しているか。	教員の募集、採用、昇任等を適切に行っているか。	教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。	教員組織の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。
自己評価 (☑を記入)	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ している ☐ 一部している ☐ していない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない	☒ つなげている ☐ 一部つなげている ☐ つなげていない	☒ 行っている ☐ 一部行っている ☐ 行っていない
点検項目に対する 現状説明	学部、学科の方針を明示している。大学および学部方針に沿って学科において対応を行っている。	方針のもと、大学および学部方針に沿って学科での対応を行っている。	年に2回ほど教員の業績を専任教授で確認して将来の方向を決めている。	大学および学部方針に沿って対応を行っている。	研究および教育内容に関して学科、分野に対する適切性が十分か適宜議論を行っている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学部方針に準じ進めている。	【長所】 ・学部方針に準じ進めている。	【長所】 ・現在および将来についての議論を行っている。	【長所】 ・学部方針に準じ進めている。	【長所】 ・現在および将来についての議論を行っている。
	【特色】 ・学部方針に準じ進めている。	【特色】 ・学部方針に準じ進めている。	【特色】 ・学科および分野、研究室において適切な状況かを随時判断している。	【特色】 ・学部方針に準じ進めている。	【特色】 ・適宜内容の吟味を行っている。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし	【課題】 ・特になし
根拠資料名					

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名矢嶋 俊介

学科名・専攻名バイオサイエンス学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	教育の理念である「実学主義」に基づく体験型カリキュラムを多く取り入れた実習や実験を通して、集団内でのコミュニケーション能力、リーダーシップ能力、協調性や対人関係の構築力を養う。	学科の教育上の目的である「生命科学に関する専門的な知識と技術を習得し、一つの課題に対して自立的に解決できる能力を身につけさせる」について、研究室における専門教育により達成させる。	学科全体としてのディプロマポリシーの達成状況を判断し、教育体制の改善に役立てる。
実行サイクル	<u> 4 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	<u> 4 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	<u> 4 </u> 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）
実施 スケジュール	共通演習（1 年次）、実験実習（2 年次～3 年次前期）において教育指導する。	研究室における専門教育の実践：3 年次前期の研究室配属後に、研究室ごとに専攻実験(専門知識・技術を習得するためのトレーニング)を行う。4 年次においては、卒業論文研究の中間発表会を行い、達成度に応じた教育指導を行う。	ディプロマポリシーの達成度評価：研究室ごとに4 年次の卒業論文および論文発表会を審査し評価する。また、卒業時にポリシーの各項目に対する自己評価アンケート調査を行い、学科全体のポリシー達成度をモニターする。
目標達成を測定する指標	共通演習、実験実習の出席状況により判断する。	3 年次の専攻実験における出席状況と評価、および4 年次の中間発表会の評価により、達成度の中間判定を行う。	卒業論文の評価をもって学生個人個人のポリシー達成度を判定する。また卒業時のアンケート調査結果を集計し、卒業論文の評価と併せて学科全体としてのポリシー達成状況を判断する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☐ 一部達成した ☒ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	共通演習（1 年生対象）において教育指導を行った。実験実習については対象学生（2、3 年生）がいないため評価不可能。	対象学生（3、4 年生）がいないため評価不可能。	対象学生（4 年生）がいないため評価不可能。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・集団内でのコミュニケーション能力、リーダーシップ能力、協調性や対人関係の構築力を養うきっかけとなる。	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・アクティブ・ラーニングの基礎と位置づけされる。	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし	【課題】 ・なし
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	生命科学分野における先端研究を一層推進させるには、先端技術を駆使した機器及び試薬の使用が必要であるため、外部からの競争的研究資金を積極的に導入する。	学会発表や学術論文等を通して、最新の研究成果を国内外の研究コミュニティに発信する。	社会への発信力強化の一環として、一般向けの講義・講演会やネット・印刷物等を通した研究成果発信を推進する。
実行サイクル	__ 4 __ 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	__ 4 __ 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	__ 4 __ 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）
実施 スケジュール	原則として教員全員が、科学研究費補助金をはじめとする競争的研究資金に申請する。	全研究室がそれぞれ国内・国外の学会や学術雑誌等で研究成果を発表することにより、的確なプレゼンテーション、さらに研究者間でのコミュニケーションにおける専門的なディスカッションを行う。	学科教員が、学内・学外で模擬講義・出張講義・講演会を実施することにより、一般向けの発信活動を行う。また、学科ホームページおよびパンフレットのコンテンツを検討・改訂することにより、メディア発信活動を行う。
目標達成を測定する指標	学科の外部資金申請者を確認する。	研究室ごとの国内学会・国外学会・学術雑誌での成果発表回数を確認する。	学内外での模擬講義・講演の回数を確認する。また、学科ホームページおよびパンフレットのコンテンツ改訂を確認する。
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	概ね、全ての教員が科学研究費補助金等の競争的研究資金に申請した。	概ね、学科所属の研究室が国内外の研究コミュニティで研究発表できている。また研究成果を学術論文へ掲載している。 ・国際学会での発表会数：17 回 ・科学論文（国際誌）掲載数：31 報	学科ホームページの充進を行った。また、オープンキャンパス及び収穫祭における模擬講義（平成 29 年 8 月 5 日、11 月 3 日～5 日）、出張講義（11 回）、市民講座（5 回）を実施した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学科に所属する全ての研究室（研究分野）が申請できている。	【長所】 ・学科所属の研究室は、国内外において毎年研究発表を行っている。	【長所】 ・最新の研究成果を発信できている。
	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし	【特色】 ・特になし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・競争的研究資金を申請または獲得できていない教員がいる。	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・学科教員全員が競争的研究資金の申請及び獲得を目指す。	【課題】 ・国外発表の数を増やす。	【課題】 ・学科ホームページの充進の頻度を増やすなど、新情報をなるべく早く発信できるようにする。
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	進学／就職活動への円滑な導入を支援するための学科独自の体制を構築する。	生命科学分野の教育・研究を通じて、グローバルな視点を持ち、世界の人々と対等に意見交換できる指導体制を構築する。	オープンキャンパス、模擬講義、出張講義、市民講座、学会基調講演などを通じて生命科学分野の研究をわかりやすく社会に発信し、高校生を中心に一般社会への科学の普及に努める。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	4 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）	4 年サイクル（平成 29 年～ 32 年）
実施 スケジュール	3 年次前期：卒業生による就職支援懇談会および専攻による大学院説明会の計画 3 年次後期～4 年次前期：計画の実施 4 年次後期：進路内定状況の把握、進路未定者と面談、必要に応じた対応策の策定	4 月：留学プログラムの学生への周知と応募の推奨。外国人研究者によるセミナー・討論会の企画。教員の国際学会への参加の計画。 5～1 月：計画の実施（参加は自由意志とする） 2～3 月：実施状況の把握と必要に応じた改善策の策定。	4 月：模擬講義や出張講義などの担当者および担当順を計画。 5～2 月：計画の実施 3 月：実施状況の把握と必要に応じた改善策の策定。
目標達成を測定する指標	就職支援懇談会あるいは大学院説明会への出席者数および最終進路調査の回答などを把握して判断する。	留学プログラム相談会への出席者数、外国人研究者によるセミナー・討論会への参加者数、国際学会などにおける発表回数を把握して判断する。	出張講義などの回数およびオープンキャンパス・キャンパスツアー学科ブース来場者数などを把握して判断する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	○バイオサイエンス学科卒業生による就職説明会を下記の要領で実施した。 2018 年 2 月 3 日（土） 13：00～17：30 57 人が出席した。 ○バイオサイエンス専攻修了生による大学院進学説明会を下記の要領で実施した。 2017 年 12 月 15 日（金） 16：20～17：50 学部 3 年生のほぼ全員が参加した。	○学部生に協定校留学説明会への参加を促した。 ○外国人科学者を招聘し大学院生ならびに学部生・教員の希望者を対象としてセミナーを開催した。開催日は以下のとおりである。 平成 29 年 5 月 24 日、7 月 18 日、7 月 25 日、7 月 28 日、12 月 8 日 平成 30 年 2 月 20 日、3 月 2 日（予定） ○教員 10 人が延べ 23 回海外出張し、国際学会などで 17 回発表した。また国際科学雑誌に 30 報の論文が掲載された。	○オープンキャンパス（平成 29 年 8 月 5 日（土）～6 日（日））、模擬講義（平成 29 年 8 月 5 日（土））、出張講義（11 回）、市民講座（4 回）、学会基調講演（2 回）実施し、全教員がこれらに取り組んだ。 ○研究成果のプレスリリースが新聞誌面や web site に掲載され、高校生や一般市民に広くその情報を発信した。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・「就職活動のイメージが湧いた」「OB の説明なので親近感があつた」など参加学生からは大好評を得た。	【長所】 ・各教員がグローバルに情報発信・情報収集することが可能となり、それを学生の教育に還元できた。	【長所】 ・入試センターと連携して高校へ出張講義を頻回行うことができた。
	【特色】 ・卒業生に講話してもらうことで就職活動やキャリア形成をイメージできるような支援を目指している。	【特色】 ・外部研究資金を獲得し、国際学会などへ積極的に参加したり、外国人研究者を招聘したりすることを目指している。	【特色】 ・教科書にある話を平易に説明するだけでなく、最新の研究成果を盛り込み、ホットな科学情報の発信を目指している。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 学部生が外国人研究者と交流する機会が少なかった。	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 外国人によるセミナーについて学部生への周知を積極的にはかり、参加を促したい。	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名矢嶋 俊介

学科名・専攻名分子生命化学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	農場実習を通じて、建学の精神を涵養する	各教科の学生の学習習熟度を把握しさらに教科間の連携が取れた広汎・総合的知識の獲得を目指す。	全教員で一丸となり、新学科の新入生の教育に努める
実行サイクル	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）
実施スケジュール	1 年次に「農場実習」を開講し、伊勢原農場、棚沢圃場において野菜、果樹、花卉、水田、生態観察を行う。	各教科担当教員間（主に精密科学、専門基礎科目）の連携を密にし、小テスト、講義内における設問等より学生の学習習熟度及び応用力を測定し、これを向上させる又は補足する機会を設ける	全ての教員が 1 年生に指導する機会（講義、実験、実習）を設ける
目標達成を測定する指標	実習内容に関するレポートを学科教員が評価する	期末試験及び専門科目の効果測定による	全教員が講義、実験、実習を担当すること
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する現状説明	農場実習を開講し、実習内容を報告させるとともに、担当教員が適切に評価した。	化学→基礎有機化学、基礎及び有機化学実験など教員間で教育内容の検討を行った。物理化学（一）、基礎有機化学では小テストや課題を行い、学生の習熟度を把握しながら講義を進めた。残念ながら期末試験において不可の評価をせざるを得ない学生が散見された。	共通演習などで教員全員が一年生の教育に携わった。
現状説明を踏まえた長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を踏まえた問題点及び次年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・小テストの効果が不十分であった	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・小テストなどの回数を増やすなどの対応を検討する	【課題】 ・なし
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	外部資金の獲得に努める	研究成果の発表を積極的に行う	円滑な研究環境の整備に努める
実行サイクル	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）
実施 スケジュール	科研費を始めとする外部資金や学内の研究プロジェクトに積極的に 応募する	4 年生、大学院生ともにまだ在籍していないことから、教員が自ら学会 発表や論文の投稿などを行う	研究設備の環境が不十分であることから、計画性をもって研究 環境の拡充に努めると共に、調達課を始めとする事務局との連 絡を密にとる
目標達成を測 定する指標	各教員が外部資金の公募に応募したかを評価する	各教員が研究成果を発表したかを評価する	計画的に備品の購入などが行われたかを評価する
自己評価 (☑を記入)	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学内の学部長主導型研究プロジェクトに応募するとともに、学科内の 多くの教員がプロジェクトに参画することになった。科研費への応募 をしない教員がいた。	多くの教員が自ら学会発表や論文の投稿を行った。研究室の体制が整って いないことから、一部成果の報告が間に合わなかった。	計画的に備品の購入を進めることができた
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学部長主導型研究プロジェクトに採択された	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・教員全員の応募を達成していない 【課題】 ・教員全員が応募するように努める	【問題点】 ・研究成果の報告ができなかった教員がいた 【課題】 ・教員全員が報告できるように努める	【問題点】 ・なし 【課題】 ・なし
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	当学科は新任教員が多いため、可能な限り休講を減らすように努め、 本学の教育体制に慣れる	学科の宣伝活動を積極的に行う	在学生の進学動機や、入試動向などの実態把握に努める
実行サイクル	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）	1 年サイクル（平成 29 年～ 30 年）
実施 スケジュール	年間を通じて講義、実験実習などで休講とならないようにし、休講 せざるを得ない場合は補講や補習で対応する	学外で行われる進学イベントなどに参加し、学科の魅力について紹介す るとともに、HP などで情報発信する	フレッシュマンセミナーや共通演習などを利用してアンケート を実施し、どのような学生が、どのような経路で入学したのか を把握し、今後の宣伝活動のための情報収集を行う
目標達成を測 定する指標	不要な休講がなかったかについて評価する	学外イベントへの参加数、情報発信を行った媒体について評価する	アンケート結果などを集計し、蓄積されたデータについて評価 する
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	学会出張に伴う休講などはあったものの、適宜補講にて対応した	夢ナビライブ、理工系大学フェア、理工系・薬学系大学フェア、生命科学 部 3 大学合同進学相談会に参加した。大学公式 HP でのアナウンス、Line@ による情報発信を行った。	学生の入学経路に関する把握を行った。得られたデータを基に、 どのような進学イベントなどに参加するかなどを検討したが、デ ータの蓄積が 1 年では不十分であった。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし	【長所】 ・なし
	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし	【特色】 ・なし
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし	【問題点】 ・なし
	【課題】 ・なし	【課題】 ・今後も継続して積極的に参加する	【課題】 ・データを継続的に蓄積していく必要がある。
根拠資料名			

学部・研究科名生命科学部

学部長・研究科委員長名矢嶋 俊介

学科名・専攻名分子微生物学科

1. 教育に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	本学科教育目的の一つは微生物のエキスパートを育てることであり、そのためには生物や化学などの基礎的科目から生物化学や分子生物学などの専門的科目まで知識の向上と関連性の理解を高めさせることを目標とする。	卒業後の社会活動および貢献を踏まえ、社会人力を育成するために教養の知識や社会理解を高め、課外活動へ積極的に参加することを目標とする。	経済が世界レベルで動いている現在、世界共通言語である英語や各種文化圏の理解が重要である。そのため、語学力の向上や異文化への理解を深めることを目標とする。
実行サイクル	4 年サイクル（平成 29 年～33 年）	4 年サイクル（平成 29 年～33 年）	4 年サイクル（平成 29 年～33 年）
実施 スケジュール	1～2年時：基礎科目の理解を深める。 2～3年時：専門科目の理解を深める。 3～4年時：各科目の関連性を理解し、卒業論文などに展開する。	学年問わず：部活、同好会、学科統一本部など。 1年時：フレッシュマンセミナー、共通演習、教養科目など。 2～4年時：各種演習科目、学内セミナーなど。	1～3年時：英語の選択科目を受講する。E-learning や English cafe など課外科目をできるだけ受講または参加。短期・長期留学に積極的に参加する。 4年時：各種発表会で発表を行う。
目標達成を測定する指標	全体、学年、学期における GPA 平均値と分布の状況から総合的に評価する。	成績がつく科目に関しては成績を指標に評価。その他は参加状況、活動状況、活動により得られた能力項目などアンケートなどを実施して評価を行う。	成績がつく科目に関しては成績を指標に評価。留学などはどの地域で何人が活動したか、その内容も含めて評価する。また、各種発表会では会の公益性、レベル、発表内容などにより総合的に評価を行う。
自己評価 (☑を記入)	■ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	■ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	■ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	1年生の講義、実験を施行し、講義および実験時間中に他の科目との関連性や必要性および高学年科目への連携性を伝え十分に理解させた。GPA 分布の状況は極大が複数に分かれていたので、特に下位のグループに対して個別指導などを行った。	入学時に全学生に対していずれかの学内課外活動グループに所属する様に促した。その結果、多くの学生が所属した。 フレッシュマンセミナーおよび共通演習でプレゼンテーションをグループごとに行わせた。その結果、各種能力の向上が確認された。	TOEIC 英語など重要性の高い選択科目の受講を促した。また、E-learning や English cafe などの課外授業の紹介し、優先的に受講する様に伝えた。 留学希望者に対する対応を行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・学生との十分なコミュニケーションがとれた。	【長所】 ・情報収集、コミュニケーション、プレゼン能力の向上	【長所】 ・英語に対する必要性などが十分伝達できた。
	【特色】 ・教員と学生間の情報伝達の充実	【特色】 ・アクティブラーニングの施行	【特色】 ・学生の英語能力会得のための必要性の認識向上
現状説明を 踏まえた	【問題点】 ・GPA 値および分布の分散	【問題点】 ・アンケートを実施しておらず	【問題点】 ・課外授業参加率の低迷
問題点及び次 年度への課題	【課題】 ・講義・実験内容の改善、学生指導	【課題】 ・年度初めに前年度のアンケートを行う。	【課題】 ・教員からの指導方法の見直し
根拠資料名			

2. 研究に関する総合的事項

	①	②	③
目 標	学生が研究室に入室するまでに研究室を立上げ、十分な研究活動体制を整えるとともに、研究を遂行する。	得られた研究成果を学会発表、シンポジウム、学会誌などで情報公開し、関連研究者などに情報を提供するとともに、一般の方々にも分かりやすい情報伝達手段で公開を行い幅広く理解してもらう。	学内の研究室またはセンターおよび学外の研究機関や企業などと連携し、課題に即した解決法の選抜および遂行を進める。
実行サイクル	____ 2 ____ 年サイクル（平成 29 年～31 年）	____ 2 ____ 年サイクル（平成 29 年～31 年）	____ 2 ____ 年サイクル（平成 29 年～31 年）
実施 スケジュール	1 年目：研究に必要な機器の設置および試薬、器具などの確保および管理体制の確立。実験の遂行。 2 年目：研究計画に基づいた研究の遂行。	1 年目：研究遂行後の発表手段の検討など。 2 年目：学会発表、シンポジウム発表を行うとともに学会誌などに投稿・発表し情報公開を行う。また、一般の方々向けに情報公開なども同時に進める。	1 年目：企業や研究機関への共同研究の打診や受入れ。 2 年目：共同研究の遂行。
目標達成を測定する指標	研究環境の充足割合を数値化して評価するとともに、研究が計画に対してどの程度進んだかを評価する。	発表の場、発表手段、数などを考慮して総合的に評価を行う。	研究の価値、企業や研究機関の規模、社会貢献度などから総合的に評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に 対する 現状説明	研究室設備設置計画に基づき、機器の設置および試薬、器具の納入および管理システムの確立を予定通り行った。 なお、現状は全体計画の 6 割程度の充足率である。	各教員が所属する学会や研究発表を行う学会や学会誌について吟味を行い、研究発表形態や発信について議論を行った。	全教員で企業や他研究機関、地域などとの連携を進めた。結果として一部の教員は他組織と連携して研究を遂行し始めている。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・予定通りの設置と納入	【長所】 ・学会活動だけでなくブログなど複数の手段を検討した	【長所】 ・連携先からの情報共有による教員の知識・技術の向上
	【特色】 ・機器のモデルを再吟味し、最適なシステムを導入	【特色】 ・ブログで高校生などに情報が伝わっている様である	【特色】 ・現場の状況を十分に把握できた。
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・発信回数の低迷	【問題点】 ・特になし
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・発信内容を広くして充実させる	【課題】 ・特になし
根拠資料名			

3. その他に関する総合的事項

	①	②
目 標	各種研究機関、企業などに対して共同研究や連携などを行い、相手（共同研究者など）が合理的に課題を解決することに関与することを目標とする。	教員の専門性を生かし、各種方法を用いて一般の方への微生物およびその周辺領域の知識、理解の向上に努めることで社会に対する貢献を行う。
実行サイクル	2 年サイクル（平成 29 年～31 年）	1 年サイクル（平成 29 年～30 年）
実施 スケジュール	1 年目：課題の収集と計画の立案。 2 年目：課題解決に向けた手法の開発、試験など。	● 公開講座や出張講義・実験などを行う。 ● 各種メディアでの情報公開。
目標達成を測定する指標	共同研究または連携先の課題に対する充足度で判断を行う。	回数や参加人数、教育貢献度などにより評価する。
自己評価 (☑を記入)	☒ 達成した ☐ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更	☐ 達成した ☒ 一部達成した ☐ 達成できず要継続 ☐ 達成できず目標の変更
目標に対する 現状説明	一部の教員が学外からの相談者に対する相談や実験の受託などを行った	中学や高校、その他で出張講義や出張実験を行った。また、価値の極めて高い研究についてはメディアを通した発表も行った。
現状説明を 踏まえた 長所・特色	【長所】 ・十分な対応ができた	【長所】 ・出張講師や実験について参加者の満足度は高かった
	【特色】 ・連携相手が満足する状況にある	【特色】 ・受講者少人数制による充実度の確保
現状説明を 踏まえた 問題点及び次 年度への課題	【問題点】 ・特になし	【問題点】 ・対応回数が思ったより少なかった
	【課題】 ・特になし	【課題】 ・各種団体やメディアに対する教員からの提案を増やす
根拠資料名		